

■ 『小高へ 父 島尾敏雄への旅』

島尾 伸三さん (60)



著者に会いたい

ずっと絶望していた

写真家が本業というのに、島尾伸三さんが当初、依頼された企画は「父を訪ねて三千里」という題名の小説だった。2年ほど逃げ回った結果、雑誌などに掲載した亡き家族にまつわる文章を集めたものに加筆する形で完成した。「小説なんて無理なんだ。第一もう、根掘り葉掘り思出ししたくないことなんだから」

思い出したくないことの一部は、小説家だった父・敏雄の代表作『死

の棘』に描かれた。神経を病んだ妻と敏雄との壮絶な日々が題材だが、長男にとってみれば、全体像のごく一部でしかない。親として、また大人として機能しなかった両親との倒錯した生活を繰り返し思い出すことは、すべてを損なわれ続けた当事者には苦痛以外の何ものでもない。

最初に自殺を試みたのは小学2年生。教室で首つりの準備中に友達に見つかり、かけつけた教師に「なに

してる」と殴られた。「絶望してしまいました。ずっと、そうかな」

過去の著作で幾度もはき出してきたその絶望感が、再び本著を支配する。父の故郷である福島県の旧小高町の回想、父との沖縄旅行の思い出、母の忌まわしいふるまいの数々。家族の記憶をたどる言葉の一つ一つに乾いた悲しみがこだまする。

だが時折、両親に従順であろうと努めた息子の姿も読み取れる。

「子供ってものは、親がどんなに最低な人間でも、やっぱり好きなんですよ。どの子供もそう。それを、醜い大人が利用する。悲しいよね」

恋人のような妻で写真家の潮田登久子さんと、まな娘で漫画家の真帆さんの支えを得て、両親の世界とは異なる家庭を営んできた。今夏、写真家人生の集大成のような写真集『中華幻紀』も自費出版した。「遊興費を稼いで、登久子さんと誰にも邪魔されずに旅行に行かなくちゃ」

(河出書房新社・2520円)

文・浜田奈美
写真・山谷勉